

開催地名：神奈川県南足柄市	
開催日時	令和2年1月18日（土） 14：00～15：30
開催場所	南足柄市文化会館
語り部	瀬戸 元（岩手県釜石市）
参加者	防災安全課職員、南足柄市民、自主防災組織 約120名
開催経緯	近年大きな災害が起こっていないため、住民の災害に対する危機意識が低く、防災訓練への参加率が低下しており、また、公助への依存が強く自助・共助の意識が低い。市でも非常食の備蓄を進めているが限界があり、個人での備蓄を啓発しているが、あまり進んでいない。これらの課題の解消に向けて、語り部のお話をヒントとしたい。
内容	<p>（1）災害時の心得</p> <p>岩手県釜石市両石町はリアス式海岸のため、高い津波の常襲地である。江戸末期から今回の東日本大震災までの約160年の間に、4回の津波によって町が壊滅しているが、それでも先祖は町を復興してきた。そして2011年、東日本大震災の津波によって、230世帯中15世帯しか残らないという壊滅的な被害を受けた。私は両石町内会の会長を務めていた。津波の怖さ、その実態とともに得た教訓を伝えたい。</p> <p>災害のとき一番大事なのは、まず自分の命、次に家族の命である。自主防災組織は、避難しろという声掛けだけで良い。住民を助けに行っても自分が犠牲になることもありうる。もし間に合わないときには、見捨てるしかない。</p> <p>消防団、警察、福祉関係者、介護者には、他人を見捨てることができなくて、一緒に亡くなった方、巻き添えになった方が少なくない。限られた時間までは手を差し伸べるが、それ以降は逃げなければならないという、その地域の避難についての規則が周知されているべきだった。私の地域では、15分たったら置き去りにして一斉に逃げる15分ルールというものがある。消防団や警察にも、皆家族があるからだ。避難訓練と率先避難が、自主防災会の役目である。</p> <p>子どもたちに「避難」という防災能力を植えつけるべきである。防災教育を終えた子どもたちが大人になったとき、皆同じような考えを持って、「逃げよう」と言ったら逃げるようになる。実際に釜石市の子どもたちは「100回逃げて、100回津波が来なくても、101回目も逃げよう」という新しい教訓を生んだ。</p> <p>避難するときには、他人に注意を喚起する言葉を発しなくてはならない。私は町内会で、先祖の位牌と菓3日分だけ持って逃げろと言っている。そして避難したら、安全が確認されるまで絶対に戻ってはならない。私にとって、震災のとき統率や安否確認に役立ったのは、強く大きく声が出るハンドマイクだった。私が防災指導をしている釜石東中学校の生徒たちは、住人が家屋から避難済みかどうかを示すための安否札を作り、震災の前年に避難弱者の家に配っていた。</p>

(2) 避難所運営に関すること

避難時、何が一番困ったかというトイレルの問題である。トイレの環境が整っていないと、寒さが増すとともに体力も落ちてくる。特に年配者は、腰が痛んで和式トイレが使えないので、ビールケースの底を四角く切り、仮設トイレの便器にそれを被せて使ってもらった。震災後、私は町内会長としてトイレトーパーを備蓄した。600人が3日間使用することを考え、必要な数量を購入した。

次に困ったのは暖房である。東日本大震災の教訓を活かし、震災後は暖房器具等を備蓄した。災害時に何が起こるかイメージして事前準備しておくことは非常に大切である。

(3) 最後に

私は防災力とは、意識力であり、イメージ力であり、そして備える力であると思っている。まず意識力とはなにか。意識力とは災害と向き合う姿勢、心構えである。イメージ力とは災害を想定した対策のことである。それから備える力とは、日頃の防災活動のことで、避難訓練や避難弱者の救護を含んだ自助共助のことである。詳しく申し上げれば、災害を意識するという事は、災害と向き合う姿勢、いわゆる危機管理意識のことである。その意識とは災害の予兆にもつながるはずだ。常に災害と向き合う姿勢を持つこと、そして災害を想定した対策を講じ、避難訓練や備蓄品を準備することが我々には必要である。



開催地より

「生の声」で語られる災害時の話には、勉強させられることが多く、職員を含め参加者の方にも大変貴重な時間になったと感じた。講演内容を整理し、地域防災力の向上につなげていきたい。